弁証法的思考

— 日中英比較文化研究 —

山 祐嗣

大阪市立大学大学院文学研究科

キーワード：弁証法的思考、弁証法的自己、文化差

Dialectical thinking: A cross-cultural study of Japanese, Chinese, and British

Hiroshi YAMA

(School of Literature and Human Sciences, Osaka City University)

Key Words: dialectical thinking, dialectical self, cultural difference

目的

Peng & Nisbett (1999) は中国人の思考が米国人の思考よりも弁証法的であることを発見し、Spencer-Rodgers, Williams, & Peng (2010) は、この当要因の弁証法を素朴な弁証法と呼んだ。これは、物事は常に変化しているという素朴な信念、矛盾への許容、対立する意見に対して中庸をとる傾向を表わしている。

本研究では、矛盾への許容に注目し、以下の3測定を用いる。第一は、弁証法的自己尺度(DDS: Spencer-Rodgers et al., 2010)で、ここでは過去の研究結果の確認に使用される。第二は、弁証法的思考(DT)測定である。相反する10対の意見が作成され、実験参加者はそれぞれの意見にどの程度賛成するか評定するよう求められた。もし矛盾への許容が高いならば、双方の意見に賛成したり反対したりするはずである。第三は、賢明性判断(WJ)測定である。これはPeng & Nisbett (1999)が確認しなかった点で、本研究では、東洋人が西洋人よりも弁証法的に思考することを賢いと思うかどうかを質問する。さらに、本研究では、中国人の弁証法的傾向が、高校2年生で行われるマルクス主義教育に影響された結果か否かを検討する。

実験デザインは、3(文化：日、中、英)×2(学年：高校1年生、大学生)であった。Peng & Nisbett (1999)によれば、日本人と中国人は、英国人よりも弁証法的と予測される。しかし、これはすべての測定にあてはまるだろうか。また、もしマルクス主義教育の影響があるならば、中国人は大学生が高校生よりも弁証法的と予測される。

方法

参加者 参加者数はTable 1に示される。

材料と手続き 3つの測定が用いられた。DSSの質問紙は32項目からなる。DTのために10対の対立意見が作成された。それは、たとえば、
(a) 外国の文化を受け入れることは、グローバル化する世界に対応できる国になるために良いと思う。
(b) 外国の文化を受け入れることは、古来の伝統文化や習慣・習俗が壊れるために良くないと思う。
これらの材料は小冊子に印刷された。実験は集団で行われ、まず参加者は、10の意見(A)にそれぞれ7件法で賛成か否かの評定を求められた。次に、32項目のDDS質問紙に7件法で回答が求められた。第三に、Aと対立する10の意見(B)への評定が求められた。最後に、10項目それぞれについて、どちらかに賛成ならもう一方には反対という判断は賢明か否かという評定が求められた。この質問は、無矛盾な思考の賢明さ判断なので、WJ得点は、逆転して計算される。

結果と考察

各参加者のDT得点は、以下のように、4がゼロとなるようにZ得点化された。

$$Z\text{-score } A_i = (\text{score } A_i - 4) / SD_{AB_i}$$

$$Z\text{-score } B_i = (\text{score } B_i - 4) / SD_{AB_i} \quad (i=1 \text{ to } 10)$$

$$DT \text{ score} = \Sigma [(Z\text{-score } A_i + Z\text{-score } B_i)] / 10$$

DSS、DT、WJの各群の平均値は、Table 1に示される。それぞれの得点を従属変数として、3×2の分散分析が行われた。

DSS得点 文化の主効果は有意だった($F(2, 378)=33.86, p<.01$)。多重比較の結果、日本人の得点は中国人の得点より、中国人の得点は英国人の得点よりも高かった。この結果は、これまでの研究とほぼ同じであった。学年の主効果が有意だった($F(1, 378)=10.20, p<.01$)。大学生は高校生よりも弁証法的だった。交互作用は非有意だった($F(2, 378)=2.94, n.s.$)。

DT得点 文化の主効果は有意だった($F(2, 378)=17.30, p<.01$)。しかし、差のパターンはDSSとは異なり、日本人の得点が中国人や英国人の得点より低いという結果だった。学年の主効果($F(1, 378)=1.21, n.s.$)、交互作用($F(2, 378)=.31, n.s.$)ともに非有意であった。

WJ得点 文化の主効果は有意であった($F(2, 378)=25.94, p<.01$)。このパターンは、不思議なことにDTとは逆で、日本人の得点が中国人・英国人の得点よりも高かった。学年の主効果は有意であった($F(1, 378)=5.48, p<.05$)。交互作用は有意($F(2, 378)=4.84, p<.01$)で、中国人においてのみ大学生の得点が高校生の得点よりも高かった($F(1, 378)=13.46, p<.01$)。

以上から、自己評価では東洋人は弁証法的かもしれないが、実際に矛盾を許容するかについては弁証法的とは言えないことがわかった。また、マルクス主義の影響は、実際の矛盾の許容というよりは、その評価レベルにおいて現れることが示された。

Table1. The mean score of DSS, DT, and WJ.

	(n)	DSS	DT	WJ
Japanese				
High school (79)		4.23	.761	4.42
University (66)		4.54	.690	4.63
Chinese				
High school (61)		4.03	.927	3.48
University (58)		4.16	.921	4.11
British				
High school (92)		3.89	.974	3.88
University (36)		3.92	.933	3.76

References

- Peng, K. & Nisbett, R. E. (1999). Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist*, 54, 741-754.
 Spencer-Rodgers, J. et al. (2010). Cultural differences in expectations of change and tolerance for contradiction: A decade of empirical research. *Personality and Social Psychology Review*, 14, 296-312.